

中小企業診断士の視点

第59回 部下への叱責は副詞にご注意



中小企業診断士 高原 伸彰
一社) 埼玉県中小企業診断協会

「失敗した部下を上司が大声で怒鳴っている」

今日このような光景を目にすることは、少なくなりました。穏やかな言葉でわかりやすく、自分の考えを伝える気持ちが重要視される時代です。たとえ内容が正しいものであっても、言葉選びや伝え方を間違えれば、パワハラと受け取られかねません。強い口調や大きな声でしか部下をコントロールできない管理者として、会社からマイナス評価を受ける可能性もあります。しかし上司も人間です。部下のミスについて感情的になってしまう場面もあるでしょう。そんなとき、思い出していただきたいのが、これからお話しする「副詞的表現」の使い方です。

ここで言う「副詞的表現」とは、日本語における副詞の用法とは少し違い、むしろ英語のそれに近いと言えるかもしれません。副詞も形容詞も「何かを修飾する」という点では同じ役割をするのですが、その使い方は微妙に異なります。学生の頃、英語教師から教わった副詞の見分け方は、「その単語を抜いて文章の意味が伝わるかどうか」を考えることでした。副詞は文全体を修飾することが多いので、抜いても文章そのものの意味がわからなくなることは少ない、というのがその理由です。

「You are not smart at all」

例えとは言えかなりひどい表現ですが、この場合、形容詞であるsmartを抜くと文全体の意味がわからなくなる一方、副詞句であるat allを抜いても大意に変化はありません。

「君が言っていることは、まったく理解できないよ」

ミスをした部下の言い訳に対する上司の発言です。本当なら「言い訳するな」と怒鳴りたいところを我慢して冷静に叱ったつもりですが、隠したはずの怒りが「まったく」という副詞に込められてしまいました。この「まったく」も、先ほどの「at all」同様、抜いても大意に変化はありません。むしろ加えてしまったことで、部下の心のドアが音を立てて閉まってしまった可能性すらあります。

私たちは、言葉に囲まれて生活をしています。言葉はそのつむぎ方次第で、豊かで実りある贈り物にもなれば、鋭い刃になることもあります。褒めるときには副詞的表現をうまく取り入れ、言葉全体を心地よいボールで包み、叱るべきときには、副詞的表現をできるだけ避け、意味が伝わる最小限の構成で伝える。コロナ禍で人と人とのつながりが見直される今だからこそ、そんな心遣いが周囲の気持ちを前向きに変えるのかもしれない。

中小企業診断士の中には、社内研修のスペシャリストがいます。中間管理職のスキルアップでお悩みの経営者の皆さま、埼玉県中小企業診断協会にぜひご相談ください。

【問い合わせ先】

埼玉県中小企業診断協会

ホームページ： <https://sai-smeca.com/>

電話：048-762-3350

Eメール： rmcsai@nifty.com